

Jesper JUST

*Bijutsu Techo ,
Artist pick - Jesper Just*

April 2022

JESPER JUST

ジェスパー・ジャスト

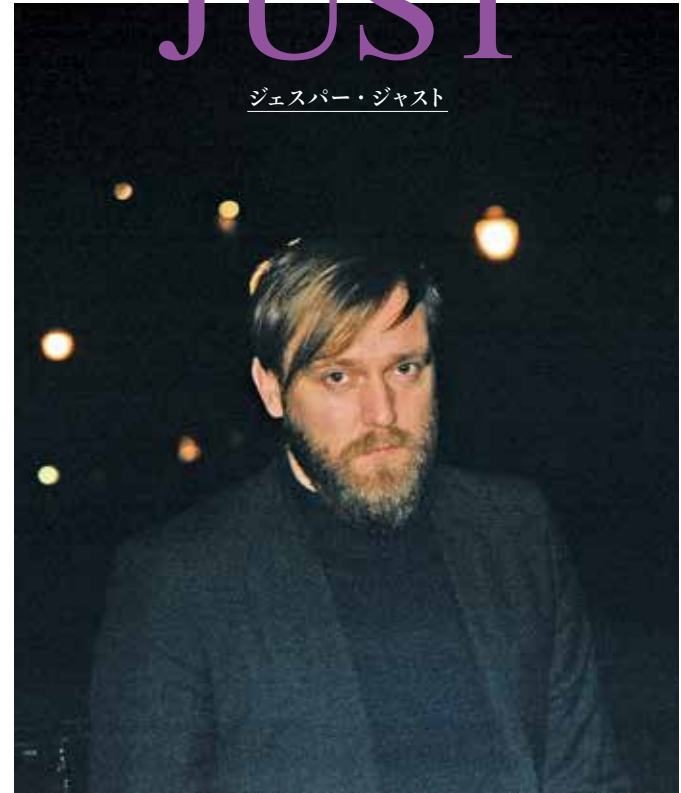


Photo by Nina Mouritzen

人間と環境の関係を反転させ、 ポストヒューマンの身体性を描く

人間と自然、空間と鑑賞者の新たな対話を生み出す、映像インスタレーションなどを手がけるジェスパー・ジャスト。日本初個展となったペロタン東京での展覧会に際して、彼が描く人間と自然の新たな関係や現在のメディア環境と身体との相互作用性について話を聞いた。

久保田晃弘(アーティスト、研究者、工学博士)＝文

Text by Akihiro Kubota

インスタレーションでは、鑑賞者の身体を使うことができます。受動的な鑑賞者を能動的な参加者にすることができなのです。

ジ

エスパー・ジャストは、1974年生まれデンマーク人アーティスト。現在はニューヨークとベルリンを拠点に活動している。1997年から2003年まで、デンマーク王立芸術アカデミーで学び、その後映像制作を開始する。作品は北米やヨーロッパ、南米やアジアの世界各地で展示され、2013年には、第55回ヴェネチア・ビエンナーレのデンマーク代表に選出された。

「アカデミーでは、多くの学生の例に漏れず、まずは絵画や彫刻の道を目指しました。しかし在学中に、写真の仕事に取り組み、ビデオカメラを使うようになりまし。最初は何もアイデアがなかつたので、まずはストリートに出てみました。泣いたり踊ったり、役者に何か感情的な演技をするよう指示をして、そこにいる人々がどのような反応をするかを見る。それが私のひとつの原点になりました。現代社会において、とくに男性は、自分の感情をあまり表に出さないようにしなくてはなりません。でも、そうした感情の制御が突然失われたらどうなるか。《No Man Is An Island》(2002)のような作品では、それをドキュメンタリー風に撮影したのです」。

「このプロジェクトを通じて、人間の反応や行動規範が、テレビや映画のようなポピュラーなメディアに強く影響を受けていることがわかりました。そこから、映像言語と感情表現に対する興味が生まれたのです」。

空間と物語の相互作用

ジャストが次に大きく飛躍したのが、2013年の第55回ヴェネチア・ビエンナーレだった。これまでのシングルチャンネルの映像作品を超えて、ひとつの建築物をフルに活用した、大規模な映像インスタレーション作品《Intercourses》(2013)に取り組んだ。これは、中国にあるパリのレブリカ都市(実際に人々がそこで生活している)を題材に、アイデンティティや国籍、帰属意識や疎外感といった複雑な問題を表現したものだ。

「インスタレーションでは、映画館や自宅で映像を見ているときは違い、作品によって鑑賞者の身体を起動し、受動的な鑑賞者を能動的な参加者にすることができなのです」。

このときのメイキング映像が残されている。そこには、壁からガラスの飲料瓶の口が突き出したオブジェが映っている。不思議に思ったので、それがなんなのかを尋ねてみた。

「それは約500年前の、デンマークのレンガ職人の伝統に根ざ



第55回ヴェネチア・ビエンナーレのデンマーク館での《Intercourses》
(2013)の展示風景

したものです。当時の労働者は酷使され、雇用主から十分な報酬をもらえなかったため、労働者はなんとかして仕返しをしようと考えました。そこで彼らは、建物のどこか見えないところに、この仕掛けを埋め込みました。風が強く吹

くと、その家から幽霊のような呪いの音がするのです。そうすることで「労働者に手を出すな (Don't mess with the workers)」というメッセージを雇用主に伝えたのです。」
ジャストはこうした空間的なインスタレーションのことを、歩いていくことで様々な景色と出会う「庭のデザイン」に喩える。
「様々な建築的発明ができました。偽物の山による開けた眺めや、洞窟に入っていくこともできる。それは映画が生まれる前から存在する、庭を歩いているような体験です。動きが物語や感情をつくり、さらにその物語が動きをつくるのです。映画のなかの視点の動きも、同じことなのかもしれません。」

入れ替わる 人間と自然の関係

今回展示された、ジャストの最新作である「Seminarium」も、そうした庭の考えに基づいている。日本で採取された植物が、湾曲したLEDパネルの光に包まれるように、ポンプにつながれたガラス容器に生けられている。LEDパネルには、様々な向きと大きさで人間の身体が映し出され、それを強化する商品のナレーションが、広告のように繰り返し流れる。
「この作品は、パロック庭園からインスピレーションを得たものです。パロック庭園は、人間が自然を支配する、という考えでつくられています。それは美的な体験というよりも、人間の力を見せつけ

るためのものです。一見未来的に見えるかもしれませんが、ここで用いられている技術は、水耕栽培だったり、グロウライトだったり、いずれもすでに日常生活のなかに存在する技術です。私たちはアントロポセン（人新世）——人間がいかにして地球を変えていったのか、という考えから、多くのことを学びました。この作品では、そうした人間中心の考え方を反転させて、植物をその中心に置きました。身体は二次的なものとなり、植物も、技術も、身体も、普段は隠されているケーブルまで表に出されます。ここでの「技術」は、植物の苗床のようなものです。技術が植物を改変し、それがまたフィードバックされていく。すべてはエージェンシーのレベルで等価に

作品での「技術」は、植物の苗床のようなものです。 技術が植物を改変し、それがまたフィードバックされていく

なりません。」

ラテン語に由来する「Seminarium」は、「seed」と「place for」が組み合わさった「苗床」を意味する言葉である。さらにそこから転じて、新しい知識や認識を育む教育機関を指すようにもなった。

「2015年にバレ・ド・トキヨーで行った展示では、いつものように、場所について考えることから始めました。この建物の地下には、何年も前に閉鎖された映画館があります。音がひどかったからです。人々は、それを「死んだ赤ちゃん (Dead Baby)」と呼びました。建築を生体に喩えたのです。そこで、その拒絶された場所に、車椅子用のスロープでしか行けないようにしました。通常の都市は健常者の身体のためにつくられていますが、この健常者と障害者の関係を反転させようと思いました。」

者としての人間と植物の関係が反転しているように見える。この展示における鑑賞者は、じつは水耕栽培されている植物であり、映像のメッセージも、人間ではなくその植物に向けられているように聞こえる。
「植物はもちろん、映像を見ることはできませんし、ディスプレイの光によって曲がるだけです。でも確実に、反応しているのです。通常人々は、植物にあまり関心を持ちませんし、その名前も知らないことがほとんどです。しかし植物は、とても複雑な感覚を持っています。私たちが地球を破壊してもいいと思ってしまうのは、植物をたんなる背景としか認識していないからです。だからこそ、この作品では、植物をその中心に据えようと思いました。ディスプレイに映っている身体は、鍛えられたダンサーのもので、それはアップグレードされた



「Seminarium」(ヘロタン東京、2021)の展示風景 Photo by Keizo Kioku Courtesy of the Artist & Perrotin



Interpassivities #1
2021 額装された写真
67×115×3.7cm
Photo by Keizo Kioku
Courtesy of the Artist & Perrotin

と感じるかもしれません。ほかにも、オフィスにあるコンピュータが創造的になったら、仕事というアイデンティティは失われます。そしてあなたは新たに生まれた自由な、そして受動的な時間であったい何をするのでしょうか。そうした状態では、インタラクティブなものも、すべて受動的になっってしまう。」

「Interpassivities」は、通常は音楽に合わせて能動的に動かしているダンスの身体が、ロマンティックなフォーレの曲を演奏する裸のMIDIピアノからの電気信号によって、直接的かつ受動的に動かされる。音楽に合わせて踊るシステムが、外的な聴覚から内的な神経系へと反転させられることで、身体が断片化され、その内部が剥き出しになる。

「私はいつも、展示した作品から学んだことを、次の作品に生かすようにしています。デンマークで

■ JESPER JUST

1974年コペンハーゲン生まれ、現在ニューヨークとベルリンを拠点に活動。2003年デンマーク王立芸術アカデミー卒業。13年には第55回ヴェネチア・ビエンナーレのデンマーク代表に選出。主な個展に08年「Romantic Delusions」(ブルックリン美術館、ニューヨーク)、15年「Servitudes」(パレ・ド・トーキョー、パリ) 18年「Coordenadas」(アナワカリ美術館、コヨアカン、メキシコ) など。

■ INFORMATION Jesper Just Seminarium

2021年12月1日～1月29日、ペロタン東京(六本木)で開催。日本初個展となった本展では「Seminarium」と「Interpassivities」の2シリーズで空間を構成。前者では4つの映像作品と東京で採取した植物などが映像インスタレーションとして展示され、後者ではパフォーマンスの写真作品が展示された。

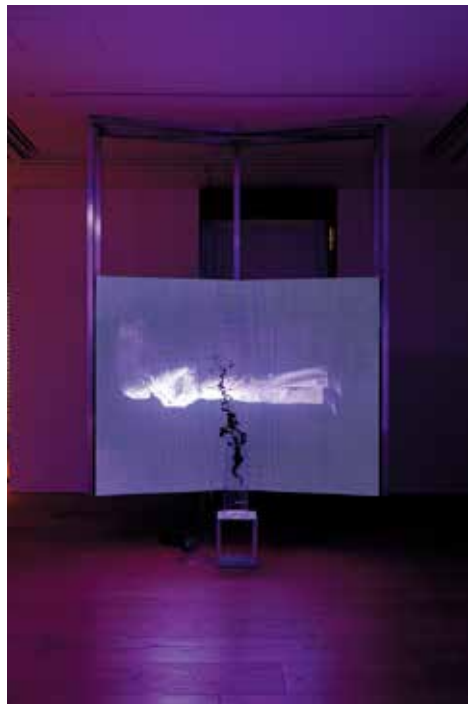
身体です。CRISPR-Cas9のような遺伝子技術で、身体を改変することが可能になり始め、やがては1000年生きられるようになるかもしれません。植物は確かに、人間に何か利益をもたらしてくれますが、それは別に人間のためのものでなく、動くことができな植物が、自分自身を守るためにつくり出しているだけです。森の木々も互いにコミュニケーションしています。ですから人間はもっと植物に敬意を払うべきだと思います。肉食をやめたベジタリアンも、そんな複雑な植物を食べているんです。」

こうした考え方は、今日の「ポストヒューマン」の思想とも深く関わっているように思える。植物栽培用の紫の光を放つモジュール型のLEDパネルは、それ自体が未来のタビデ像のように彫刻的であり、身体的でもある。

「確かに、欠けたLEDパネルは、その背後の配線、すなわち画面の

身体は能動か受動か

同時に展示されている「Interpassivities」(2021)は、バレエの形式によって理想化



Seminarium #1 2021 LEDパネル12枚、アルミニウム構造、アルミニウム製演台、ガラス製花瓶、ブライトサインメディアプレーヤー、モノラルスピーカー、ハルジオン 350×210×100cm Photo by Keizo Kioku
Courtesy of the Artist & Perrotin

された身体を、物理的、電氣的に解体していくポストパフォーマンス作品である。タイトルは、哲学者のロバート・フアラースラヴォイ・ジジエクが、インタラクティブイティの能動性(activity)を受動性(passivity)に入れ替えてつくった造語に由来している。

「Interpassivity」とは、他者に自分のかわりに働いてもらうのではなく、消費してもらったり、喜びを起用したもので、リヨンでの展覧会のための作品です。俳優の脳の状態がMRI(磁気共鳴画像)でスキャンされるのですが、俳優が別の役を演じているときの脳の状態に興味があります。まだ制作中なのですが、ヨーロッパだけでなく、ぜひ日本でも公演を行いたいと思っています。」

このように、ジャストのアイデアは、作品ごとに少しずつ成長し、新しい種類のバイオ環境アートや、ポストヒューマン・パフォーマンスへと進化している。これからも、ジャストの活動に注目していきたい。